

大学における日本語教育①

ープロジェクトワーク型日本語教育の効果ー

大石 寧子
(徳島大学 国際センター)

キーワード：日本語教育 プロジェクトワーク 役割分化

1. はじめに

大学における日本語教育は、様々な形態がある。大きく分けると、日本語そのものを習得するものとある程度の日本語力を有し、それを道具として何かを遂行するものがある。ここでは、今年度前期に行った「日本事情Ⅰ」のプロジェクトワーク（以下PWとする）を基にしたプロジェクト型日本語教育を検証したい。

2. 日本語教育におけるプロジェクトワーク

2.1 プロジェクト・ワークとは

日本語教育の中では、中級以上（とは限らないものもあるが）の学習者を対象とした効果のある学習法として、「一つのプロジェクトワークを仕上げたという自信は大きく、今後の学習にも良い影響を与えることは間違いない（熊井(1990)）」と評価する声が多い。徳島大学では、日本人と同等もしくは準ずる日本語力を有する学生が受講している共通教育「日本語・日本事情」では、しばしば使われている。また2008年～2010年に徳島大学で行われた経済産業省と文部科学省による就職支援プログラム「アジア人財資金構想事業コース」は、このPWをベースにしたコースデザイン（Project Based learning:PBL）が根幹をなし、担当した一期生の2年目で実施し、その効果が多岐にわたったことを大いに実感した。

PWについて、田中・斉藤(1993)は、「クラスまたは学習者のグループでなにかのプロジェクトを設定し、それを遂行していく過程でその外国語を多量に使用しながら学習していく活動」と定義している。そしてPWは、①あるテーマについて読んだり聞いたり書いたりディスカッションしたりという四技能を伸ばすことを組み込み、日

本語能力そのものに視点を置いて、行う②学習者が自分で考えたそれぞれのテーマをに従って、調査し、発表する③クラスでテーマを決定し、役割を分担し、調査して、最終的に成果品を残すの3つに分けられる。いずれもその過程では、日本語が第一の道具となる。「日本事情Ⅰ」では、3番目の成果品を残すというPWを行った。

2.2 「留学生のための生活ハンドブック」

何を成果品とするかは、授業初日に皆で話しあった。来日して3週間ぐらいうれば、日本の生活にもだんだん慣れ、日本人の友人もでき始めるが、それまでが不安で不自由するという自分達の体験を下に来日3週間までの留学生を対象とした生活ハンドブックの作成とし、後輩達に実際使ってもらえるようなものにしたいと気持ちを一つにした。

クラス活動では全員が同じように発話の機会を得ることは難しいが、プロジェクトワークのいい点の一つは、「役割分化」（田中・斉藤 1993）が、学習者のレベル・ニーズ・テーマの内容に応じて可能であり、学習者それぞれが活かされることである。

3. 全体の構成と役割

全行程中、教員はファシリテーターとなり、学生が主体的に進めていくこととした。内容ごとに担当を決め、その中から全体を見るリーダーと編集責任者を選出した。大枠の流れや節目ごとの相談は、全員で行うこととした。

3.1 「生活ハンドブック」の構成

全体の構成と係わった人数は、以下のようであ

る。

内容は①店関係ースーパー、百元ショップ、電
気量販店、食事処：2名、②アパート・携帯電話・
インターネットの契約に関する事項：3名、③
大学までの交通と生活品の貸借：2名、またこれ
らの④地図作成は、それぞれが作成し、あとでま
とめた。自発的に各担当を決め、リーダーと編集
責任者を互選で1名ずつ決めた。

冊子のサイズは携行するのに便利なように、小
さく薄くを方針に、A6サイズで14頁とした。

タイトルは、全員1つずつ案を出し、その中か
ら選んだ。

3.2 実施状況

2011 年度前期の「日本事情 I」は以下の状況
の下、実施された。

期間： 2011 年 4 月 12 日～8 月 3 日

時間数： 1 回 90 分、全 16 回 （個々の調査は、
時間に含まず宿題とした）

学生： 国籍・性別・日本語能力

No	国籍	性別	日本語能力
1	中国	F	上級
2	中国	F	上級
3	韓国	M	上級
4	韓国	M	中級ー上
5	韓国	M	中級ー上
6	クウェート	M	中級ー中
7	ベラルーシ	M	中級ー下

3.3 作成の流れ

- 1) 内容及び担当、リーダー、編集責任者決定
- 2) 各グループで情報収集・原稿作成
- 3) 印刷業者との打ち合わせ（入稿・納品期限、
印刷費、納入状態、用紙、レイアウト等）
- 4) 地域及び学生サポーター、職員から情報収集
- 5) 初稿まとめ、レイアウト・フォント等の統一
- 6) 日本人（学生・地域・職員・教員）によるチ
ェック、情報訂正・補充
- 7) 表紙の写真撮影
- 8) 印刷業者渡し、第1校チェック、最終版纳入

4. 活動状況

積極的に街中に出て、情報収集できるグループ
とリードする人材不足で遅々として方向が定ま
らず、情報収集ができないグループが出てきたの
で、教員が日本人に教室に参加してもらい、そこ
で収集する方向をリーダーに示唆した。今回のリ
ーダーは、性格もあってか、これ以降は難航して
いるグループに声をかけ、問題点を洗い出したり、
手伝ったりという様子が見え始め、全体の時間配
分にも気を配り、問題点は教員にあげ、アドバイ
スや助力を求めてきた。追い込みに入ったあたり
から学生達は、互いにパソコンの使い方や日本語
原稿の訂正など得意分野での協力がみられ、全体
に真剣度が増していった。

5. 成果と課題

終了後の学生のアンケートによると、①大変だ
ったが、達成感が持てた②チームワークの大切さ
を痛感した③終わってみると日本語力がアップ
したように思うという評価と①もっと頑張った
らもっといいものができたと思う②自分はいま
意見を言わなかったが、印刷物を見て、もっと
参加すればよかったと思ったなどの意見もみら
れた。お互いの日本語力に目を向け、情報を取
って原稿を書くということで、精査されたこともブ
ラスになり、開始前より日本語力は向上した。し
かし日本語力や熱意の高い者に任せた部分があ
ったことも事実で、互いの反省からもその声が聞
かれ、これは教員にとっても今後の課題となる。
また参加した日本人側からもアンケートを取る
べきであり、次回への課題となった。

プロジェクトワークを通して得たものは事実
多く、役割分化で、自発的に係わるという点から
中上級学習者に対しては、やはり効果的な学習方
法だと思える。

参考文献：アジア人財資金構想事業共通カリキュ
ラムD（プロジェクトワーク編）2008 経産省
田中望、斉藤聡美 1993「日本語教育の理論と実
際ー学習支援システムの開発」大修館書店